



山登如

2020年度

付中通信第7号

多様性社会の意味その1

2020.7.30

高水高等学校附属中学校長 宮本 剛

本校独自の「探究学習」に取り組んで、今年4年目となりました。今さらその特徴は説明するまでもないと思いますが、今回のタイトルとの兼ね合いで、あえて簡単に触れます。

まず、同じテーマで学習する仲間は、学年を越えて集まってくるということです。中学校所属の教師全員が自分の得意（興味関心の高い）分野で講座（ゼミ）を受け持ち、生徒は先生たちのプレゼンを聞いて、興味関心の高いゼミを選んで集まり、学習グループを構成します。したがってこのゼミには異学年の生徒、つまり同級生だけでなく先輩や後輩が所属しており、一緒に探究していくことになります。

そしてもう一つの特徴は、学年末に中1から高2までの5学年が一堂に会して、それぞれのゼミの取り組みをプレゼンし、みんなでその成果を共有し合うことです。最も優秀な取り組みには「楽学カップ」が授与されます。これが第2の文化祭とも呼ばれる所以（ゆえん）です。



令和元年度 「中六合同発表会」の一コマ

ちなみに探究学習とは、対話を通じてさまざまな観点から物事を考え課題を発見し、それを解く方法を考え出したり検討したりしながら、なんらかの答えを導き出す学習です。

さて、そのゼミの担当者として今年、私が掲げたテーマは、昨年に引き続き「多様性社会」です。AI化・

グローバル化、そして少子高齢化が、21世紀の日本を考え、生きがいのある人生を送る上で欠かせない3つのテーマです。そしてこれらに共通する課題に、多様性の受容と克服が挙げられます。

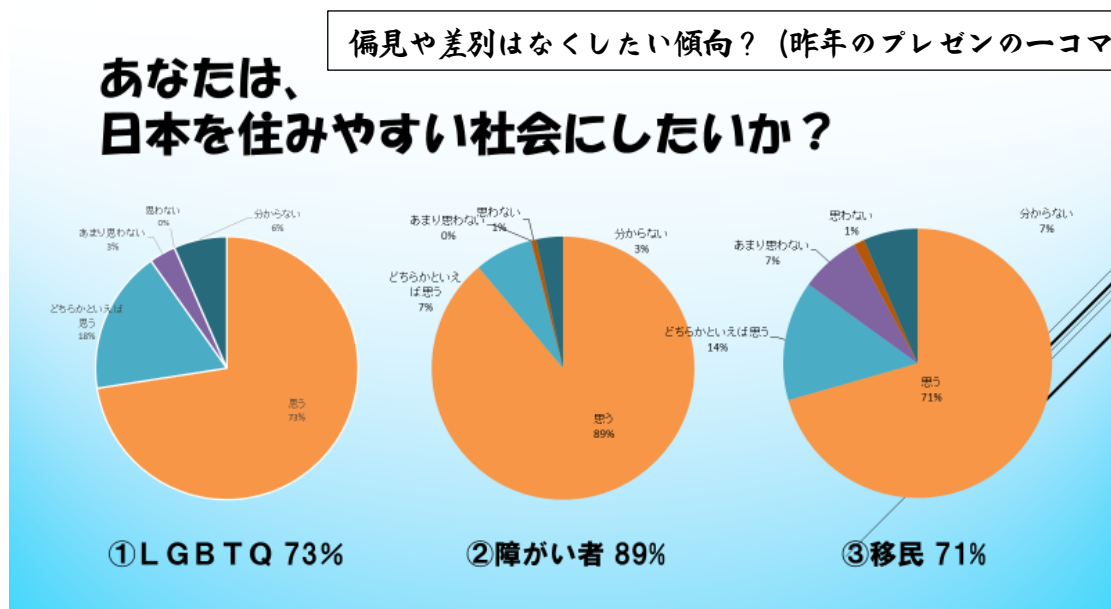
そこで、昨年はLGBT（性的マイノリティ）を巡る問題を探り上げ、カナダの姉妹校や南アフリカ共和国のALTの協力も得て、日本人のLGBTの人たちに対する意識を他国と

比較しながら、問題点や課題をみんなで話し合いました。

生徒と一緒に探究の方向性を検討する過程で、私自身ははっきりと気づいたことがありました。まず、そのきっかけとなったのは、「Q」の存在でした。単純に男性女性という枠組みに納まらない性的マイノリティと言われる人々を、LGBTと4分類する、そのこと自体がすでに多様性を考える視点として不十分だということでした。現在は「LGBTQ」からさらに進めて、「LGBTQIA」という呼称を使う国や地域も増えているらしいのです。詳しくは、<https://jobrainbow.jp/magazine/whatislgbtqia> を検索のこと。

これは一体どういうことなのかということ、およそ社会と名づけられた人の集団においては、性や人種、民族、そして歴史的な過程や政治的統治の都合など、様々な要因で偏見や差別が横行し、虐(しいた)げられ、卑(いや)しめられ、理不尽極まりない身体的肉体的苦痛に苛(さい)まれてきた人々が必ずいたこと、そして、人類の進歩とは、そうした偏見や差別を科学的かつ倫理的な観点から徹底的に批判、否定し、人はみな平等を前提とする社会制度を構築し、さらにその理念が失われないようにと、教育という手段で次世代にも伝え、限りなく永遠に固定化しようとして努力してきたことを指します。

その結果、みごとに私たち、近代の教育を受けてきた者たちは、偏見や差別は否定すべき



ものとの性向を獲得しました。これは人類社会の世界的な潮流であって、もし偏見や差別を見逃しているような国や企業があろうものなら、世界的な批判にさらされることとなります。こうした事案は、日常的に新聞等でもよく採り上げられていますね。

しかし、男女や人種、あるいは同和問題における偏見や差別など、長い時間と労力をかけて解決を図ってきたテーマについては、確かに私たちの認識はほぼ同じレベルに達したと言ってよいと思うのですが、「LGBT」のような新たな違いの発見・認識から生じた偏見や差別に関しては、どうも応用が利かないようなのです。

(以下次号「多様性社会の意味その2」に続く)